

『——続いてのニュースです。昨夜、〇〇県〇〇市の川辺で遺体が見つかりました。遺体は、県内在住の男子大学生で、警察は事故と事件の両面から捜査を進めています』

あなたに会えたこと、それが私の最大の幸せでした。この菊、きれいでしよう。あなたのために選んだのです。この色は、あなたの象徴でした。

そう、表情豊かなあなたの周りには必ず誰かがいました。その分、悩んでいる姿も見かけることが多かったのです。私は、あなたの役に立つことができましたか。

川辺には赤と黄の菊を持つ女性がいた。遺体発見現場として報道された川辺には、既に他の花も供えられている。女性は、ゆっくりと腰を下ろすと、持っていた花をそっと置いた。吹いた風が、女性の髪を小さく揺らす。

私達の出会いは、高校の入学式でしたね。あなたは快活で明るくて周りの人達とすぐに仲良くなって、いつも笑顔を浮かべている姿が素敵でした。

私は話下手でしたから、そんなあなたが本当に羨ましかったです。気が付けば、あなたを目で追う日々が増えていきました。

二学期の初めのことです。私は同じクラスの女子達からいじめに遭いました。昼休みに先生に呼ばれて、席を空けた隙に財布を盗まれたのです。彼女は私に見せびらかすように持ちながら立っていました。返すように言える訳も無くて困りました。財布が無ければ昼食を買えません。その時でした。突然あなたはクラスの女子の元へ

行くと、彼女の腕をつかみ『あいつに返せ』と言ってくれましたね。彼女はあなたに素直に従い、いじめも徐々に無くなりました。何かが起きる度に、あなたが庇ってくれたおかげです。

二年生になると、クラスが離れ離れになってしまい、会える機会は一気に減ってしまいました。会えないことがだんだんと辛くなり、あなたを遠くから見つけた時には、うれしくて胸の高鳴りが収まりませんでした。

そして、道端の落ち葉が目立つようになったある日、この想いは恋だと気付きました。理由なんてものはありません。直感で、そう思ったのです。

でも高校を卒業する前に、あなたに想いを伝えることはできませんでした。その頃のあなたには、お似合いの彼女がいましたよね。悲しさもありましたけれど、幸せそうなあなたを見ては、諦めるしかありませんでした。

女性は川の方へ目を向ける。大量の制服姿が目に入ると、近付けないと判断すると菊に視線を戻した。

そういえば、大学の入学を機に私の一人暮らしが始まりました。偶然にも、引越先はあなたの家の隣でした。そのことに大きな運命を感じたのです。

窓が開いていると、テレビやゲームの音、話し声、目覚まし時計の響く音、様々なものが聞こえてきました。

あなたがあんまりドラマを見ないこと、友人関係について母親に相談をしていたこと、コーヒートを零して父親に怒られていたこと、高校の中とは違う一面を知ること、あなたがへの想いがより強くなっていきました。

女性は、ゆっくり立ち上がると、川の上流に向かって

歩き出す。その顔には笑みが浮かんでいた。

大学は違いましたけど、私達は何度も様々な場所で会いましたよね。お互いに、今の生活について語りあいました。大学入学から一年も経たない内に彼女と別れたと聞いた時は、衝撃的でした。まだ私にもチャンスが残っているのと知り、とてもうれしく思ったのです。夜遅い時には私を家まで送ってくれて、家の近さに驚いていたあなたの表情を今でもはっきりと覚えています。

突然の電話にも何度も付き合ってくれました。今の天気や課題のこと、高校での思い出話、電話の前に行っていたこと、話す内容は尽きませんでした。夜中の電話を嫌がりながらも、私の話すことを黙って聞き続けてくれていましたね。

そんな優しいあなたに、一層惹かれました。

女性は、歩く途中に見つけた橋の中心まで渡る。左右を見渡すと、欄干に手を乗せた。

一週間前のこの場所でも、あなたは私に気が付いてくれました。私は、いつも通り会話をすることができると思っ、声をかけたのです。それなのに、あなたは私から逃げるかのように走り出しました。何が起きたのか一瞬分かりませんでした。私も走り出しました。

そして、あの川辺で立ち止まったあなたの顔は、とても疲れ切っていました。走るのは得意でしたから、それ以外の理由なのでしょう。

「一体、何なんだよ。いつも用も無いのに俺の生活に割り込んで来るのは何でだ」

淡々とした口調は、あなたの発した言葉とは信じられ

ない程の低い声でした。目つきも鋭く、突き放されたように感じてしまいました。

「偶然を振る舞って話しかけてきたり、何回電話を切っても自分の気が済むまでかけ直してきたり、昔からこんな奴だったのか」

今でも、あなたの言った言葉の意味が分かりません。私には思い当たることなど、一つも無いのです。他の誰かと話しているのかとも考えました。けれど、私とあなた以外の影はありませんでした。

その後のことは、何も覚えていません。気が付いた時には、もう家の中で涙を零していました。きつと、優しかったあなたが変わってしまったことに対するショックが、想像以上に大きかったのでしょう。こんな日が訪れるなんて、考えたことも無かったのですから。

女性は橋の柵を乗り越えて、足場の少ない反対側へと出た。緊張からか、両足が小刻みに震えていた。橋から川までの距離は短い方だが、落ちれば簡単に命を絶てるだろう。

あなたが死んだなんて、全く信じられません。一人は寂しいでしょう。今からあなたの元へ向かいます。ですから、待っていてください。もう、あなたとは二度と離れたくありません。

女性は目を閉じると、深く息を吐いた。そして、重心を前へ動かし、足を放り投げる。

女性の髪の毛が、大きく舞い上がった。

目を覚ますと、白い天井が視界に映った。首を動かして、周囲の様子も確認する。先程まで立っていた場所とも、想像していた天国とも異なる場所で、どうやら、女性性は病院の中で寝ていたらしい。

看護師が言うには、遺体発見現場に捜査に来ていた警察官が上流から流れて来た彼女を発見、すぐに応急処置を施したために、命に支障は無かったとのことだった。体に幾重にも巻かれた包帯に目を向ける。眺めていても、痛みは少しも感じられなかった。

何故、あなたは私を拒絶するのですか。私はあなたの元へ行けるまで、永遠に諦めません。そちらの世界で再び逢いましょうね。

『続いてのニュースです。一昨日、〇〇県〇〇市で発見された男性の遺体に抵抗の痕跡が見られたことから、事件として捜査が始まりました。また、警察の調べによると、男性はストーカー被害にあっていたと遺族に話していたことが判明し、それとの関連を含めて、警察はさらに捜査を進めています』

菊(黄) …… 破れた恋

(赤) …… あなたを愛する